

SAITO MEO | RELAX, said the night man

齋藤芽生 | RELAX, said the night man

2024年10月26日(土)～11月30日(土)

ギャラリー・アートアンリミテッド <http://www.artunlimited.co.jp/current/>

営業時間：13時～18時半 休廊日：日曜、火曜、祝日 \*11/3-5, 11/23-24は連休

旅を源泉としてきた風土と情緒を描いてきた画家、齋藤芽生。今回は「リラックス」をキーワードに描いたスケッチブックを元に描かれた新作の小品集を展示する。タイトルはイーグルスの「ホテル・カリフォルニア」の一節から来ているが、決してアメリカの風景をそのまま描いた訳ではない。遠い時代のアメリカへの憧れやコンプレックスを背景に、絵画の多数の構成要素をカラフルなスケッチで描き、現実と空想を交えて、ひとつの絵画へと昇華させる過程が見える。多彩なアクリルガッシュの絵画は、画家のセレクトによるカラフルなマットで、妖艶で色彩溢れる明るい空間を創出している。アクリル画の新作22点とジークレープリント8点を展示。

<作家コメント>

窮屈な日々癒しを求め、気楽な旅の想像をノートに描き溜める。ある時『ホテル・カリフォルニア』の呪文めいた歌詞「relax…」と結びつき、気楽な旅も一抹の不穏を帯びてきた。引き返せぬ距離、見慣れない標識。大袈裟な看板、年代不明の壁紙、誰かの気配の残る椅子。孤独な旅人の目に焼き付く様々なオーナメントを描く、新シリーズ。

齋藤 芽生(さいとう・めお)

齋藤芽生「RELAX NOTE」より







1



2



3



4

1. Twilight Rotary 2024 18.0×18.0cm アクリルガッシュ、紙  
2. Pink Polka-dots Room 2024 18.0×18.0cm アクリルガッシュ、紙  
3. Night Breeze Deck 2024 28 x 28cm アクリルガッシュ、紙  
4. Mermaid of Pool shower 2024 28.0×18.0cm アクリルガッシュ、紙

©Meo SAITO , Courtesy of gallery ART UNLIMITED

<略歴>齋藤芽生 (さいとうめお) 1973年東京都生まれ。東京在住。東京藝術大学教授。図鑑形式で博物誌のように世界を描き、不在の住人を団地の窓の風景で表現など、現実と幻想を交えた独自の絵画を展開。「四畳半みくじ」など、言葉による稀有な才能も発揮している。おもな展覧会に、「VOCA 展 現代美術の新しい地平—新しい平面の作家たち」(上野の森美術館、2005・2010年)、「アーティストファイル 2009—現代の作家たち」(国立新美術館、2009年)、「祝祭と祈りのテキスタイル」(熊本市現代美術館、2010年)、「大原美術館 秋の有隣荘特別公開 齋藤 芽生 密愛村」(大原美術館、2016年)。「齋藤芽生とフローラの神殿」(目黒区美術館、2019年)は、図鑑、団地、旅を主なテーマに個展を開催。おもな出版物に、作品集『徒花図鑑』(芸術新聞社、2011年)、『四畳半みくじ』(芸術新聞社、2014年)、絵本『吸血鬼のおはなし』(福音館書店、2009年)、絵本『カステラ、カステラ』(福音館書店、2013年)などがある。

ギャラリー・アートアンリミテッド / 担当: 高砂・瀬野 [staff@artunlimited.co.jp](mailto:staff@artunlimited.co.jp)

〒107-0062 港区南青山 1-26-4 六本木ダイヤビル 3F tel:03-6805-5280 <http://www.artunlimited.co.jp>

# Relax SAID THE NIGHT MAN

ドローイングをする習慣を長いこと封印していた私だが、心境の変化で、ノートにカラーペンで即興的に描くことを始めた。こういう気楽な描き方に身を任せるのは、高校の授業中の落書き以来だ。

物語や文学的言語を絵に置き換えるような制作方法や、実際の旅を写真記録する取材方法をいったん忘れ、瞬時に思いついたものの断片を連想的に描きとめる。今までの発想のややこしさを見直し、リラックスした描画にシンプルなデザイン性を見出したい思いもある。この展覧会ではその「Relax ノート」と、ドローイングから枝葉を広げた絵の数々を展示した。

店舗・ホテルのオーナメントや道路沿いの装飾物のイメージをつい描きたがるのは、昔から変わらない。ただし落書きの中のそれらのイメージは、大人になってからの旅の実経験とは違うところから来ている。映画や音楽の影響、親から受け継いだ趣味などの蓄積に、その源泉はある。

日本文学や昭和歌謡的情念との親和性で作品に言及されることが多く、それを自負してもいたが、一方で心の倉庫に押し込めていた西欧文化への憧れが、このRelax ノートの中ではいくらか素直に顔を覗かせる。小学校の頃に集めた50-60年代アメリカンポップス。洋書屋で買った英字レタリングや飾り罫の見本帳。ヴェンダースやジャームッシュのざらついた映像を通したアメリカ。収集したヨーロッパヴィンテージのドレスの花柄。どの図がなんの影響を受けているかなどという説明抜きに、自然に身についた妄想の西欧風味が各イメージの小さな部品になっている。

無邪気に西欧的なものに憧れることにうしろめたさを感じ始めたのは、皮肉にも、美術の道に入って以降だ。団塊生まれの親世代や大人たちから伝染したコンプレックスかもしれない。アメリカに関しては特に、そのカルチャーを表立って礼賛しながらないのに実は圧倒的なパワーバランスに白旗あげてもいる、という相反感情が周囲にあった。しかしこの2020年代の世界の混沌、特にアメリカのパワーの変貌を前にして、今さらながら自分の片隅に培ってきたアメリカへのイメージの集積を見直してみたい、とも考えている。

窮屈な仕事の仕方からも、閉塞した文化・政治の現況からも一旦解放されたいと思って始めた、気楽なドローイングノート。自身に暗示をかけるための「Relax」という言葉から初めに思い出したのが、イーグルス『ホテル・カリフォルニア』の歌詞の一節だった。

Relax, said the night man / We are programmed to receive  
You can check out any time you like / But you can never leave

詞の全体が何を示しているのか、世界中のリスナー各々の解釈がある偉大な曲だ。

不思議なホテルの夜警が私に囁きかける「Relax」とは、アジアの隅から欧米文化に憧れた無邪気な思春期に戻り、20世紀後半の虚妄の多幸感や陶酔感にもう一度浸ることを許してくれる、魔力的な言葉。一方で、あの幻惑的な幸福の追憶に埋もれる限りは、何もかも可視的で自己責任のつきまとう、楽観が一切の許されないこの現代に生きる資格も失う。そんな警告も発しているあやうい「Relax」なのだ。